

平成22年度 学校自己評価システムシート

(私立 春日部共栄高等学校)

目指す学校像	全人的人間の育成という精神を基礎として、知、徳、体の調和のとれた豊かな人間性を育み、社会の発展に寄与する有能な人材を養成する。
--------	---

重点目標	1 社会貢献の意識を基礎とした高い志を育む自治活動の展開 2 生徒からの期待や信頼に高い水準で応え得る授業の実践 3 生徒の可能性を引き出し、生徒の夢を実現する進路指導の充実 4 生徒、保護者、卒業生をはじめとする学校関係者への情報提供の推進
------	--

達成度	A	目標が十分達成できた
	B	目標が概ね達成できた
	C	取り組みに変化の兆しがみられた
	D	取り組みが不十分であった

<学校関係者評価委員会>	
協議委員 (学校関係者)	6名
内部委員 (教職員)	6名

学校自己評価				
年度	目標	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	①「至誠一貫」の精神のもと、上級生が下級生を見守り、リードする伝統づくり ②年齢に応じた社会貢献やボランティア活動の実践 ③生徒どうしが互いに応援しあい、達成感を共有できる環境づくり	・「日頃から心がけよう！他人への配慮十カ条」のHRにおける有効活用 ・各委員会の年間活動予定表作成 ・可能な範囲で統計をとりながらの委員会活動報告、情報発信 ・年間ボランティア活動予定表の作成、活用 ・各クラブの試合応援や定期演奏会への参加	A	・教育理念、校訓、モットー、共栄生七則、「十カ条」を整理し、人間形成のうえでの支柱として指導できるようにする。 ・「十カ条」をLHR計画に取り入れ、定期的な規範意識チェックに活用したい。 ・方面別通学会の活性化によって、集団の力による規範意識向上を目指す。 ・社会貢献としての達成感を持たせ、自発的な参加と自己啓発を促していきたい。 ・大会やコンクールの集約と整理、情報発信、気軽に応援しあえる環境づくりを進める。 ・壮行会が形骸化しないように工夫していく。
2	①生徒の自己学習力育成を可能にする授業の実践 ②授業点検と改善の実施 ③教員のスキルアップのための研修への参加	・家庭学習計画表モデル(日常モデル、夏モデルなど)の提示 ・生徒個々の家庭学習計画表の作成 ・入試問題から逆算した各分野、単元での<重要問題>の提示 ・<重要問題>を意識したシラバスの作成 ・各教科オリジナルテキスト作成 ・授業アンケートの活用による授業点検と改善 ・教員どうしによる授業公開、意見交換 ・年間校外研修一覧表(参加者の満足度も記録)の活用	B	・HRや個人面談を利用して、3年間を見通した計画的な家庭学習を促すはたらきかけを展開していく。 ・<重要問題>の手応え(正答率)を模試データ等を参考に検証し、生徒の理解度を測りながら達成感を共有する。 ・プリントで配布されているテキストの冊子化。 ・オリジナルテキストの有効利用。 ・総合満足度が70%未満の教員については、授業改善後の再評価にて70%以上確保に努める。 ・自ら進んで授業を見学してもらい、授業改善に役立てるといった動きもつくっていく。 ・研修で入手した資料整理が不十分。情報を共有できるシステムを構築していく。
3	①生徒の可能性を引き出し、生徒個々に応じた進路開拓 ②進学講習や模試等の仕掛けによる学力増進 ③生徒個々が充実した大学生活を過ごせる大学選択	・生徒に対する啓蒙活動の充実および意識啓発 ・各種講習や試験の整理、充実と活用 ・「東京大・千葉大・早稲田大」を念頭に、難関大学への合格に向けた進路指導 ・保護者の理解、協力を得るための情報発信	B	・「学習の手引き」の内容を工夫し、日常的に利用できるものにしていく必要がある。 ・長期休業講習の目標の明確化、テキストの厳選を引き続き検討する。 ・実力試験や模試を中間目標とし、データの蓄積、分析を進める中で、難関大学合格率を高めていく。 ・引き続き保護者に対する早めの情報提供を心がけ、家庭との連帯を強めていく。
4	①掲示物を媒体とした生徒に対する意識啓発 ②本校Web pageを活用した学校関係者への情報発信	・生徒、卒業生の幅広い成果を伝える「快音」の発行、活用 ・学習・進路に関する有益情報を伝える「進学通信」の発行、活用 ・年間アクセス件数の把握 ・最新情報の提供回数の増加	B	・「快音」「進学通信」は、春日部共栄を語る情報媒体として定着したが、さらにネット配信等を含め、これらの活用法の幅を広げていく。 ・緊急時のみならず、定期的な一斉メール配信システムの活用法についても検討していく。

学校関係者評価
実施日 平成23年3月5日
学校関係者からの意見・要望・評価等
<ul style="list-style-type: none"> いろいろな角度からの取り組みを実践しているのので、この学校評価を通じて見いだされた手応えや問題点等を全教員で共有することがより大切になる。そうすることでおのずと全教員の目が生徒へ向き、生徒を中心に置いた効果的な施策ができていくと考える。 学校として様々な取り組みを行い、その成果も上がっていると感じているが、学校自己評価という観点で見ると、具体策に対する評価指標の設定が曖昧で、達成度を客観的に計るための数値的目標がほとんど設定されていないのは残念である。目標に対する達成度を計るとき、「何が足りていて、何が不足か、それは何が原因で、何をやるのが効果的か、そしてそれがどうできたか」といった体系的な組み立てと数値的要素での前年度比較が不可欠と考える。 各年度の評価項目とそれに対する具体策は、教員の特に生徒と直接関わる時間の確保という側面からも、もう少し絞って、今年度はこれに集中して取り組むという考え方がより効果的であると思われる。 学校評価の中で各種アンケートの結果分析はとても重要である。その中でうまくいっている面とそうでない面を整理し、次の対策へつなげていただきたい。 教員、生徒、保護者の意識の差から次年度の課題が見えてくるケースも多い。来年度は保護者アンケートの実施を積極的考えて欲しい 子どもの教育について家庭にゆだねる場面がもっとあってよいと思う。 年度評価の達成度(A～D)については、もう少し高くみてよいと思う。